

斗南藩について

1868年(明治元年)、鳥羽・伏見の戦いに始まった戊辰戦争で朝敵の汚名を着せられたまま廃藩になり、所領をすべて没収された会津松平家は翌年、松平容保の子である月、容大(2歳)を藩主として家名存続を許された。

28万石あった所領は3万石まで格下げされ、新領地として斗南の地(現在の三戸、上北、下北の3郡と岩手県の一部)を与えられ、ここに斗南藩が成立した。しかしこれは全国唯一挙藩流罪という大変厳しい処分であった。

明治3年5月、希望と悲壮感を抱いて藩士やその家族17,000人の移動が始まった。

海路あるいは陸路をたどり、長い年月を費やして斗南の地に降り立った。しかし入植した藩士たちの生活は困窮を極めた。

みちのくの斗南いかにと人間はば 神代のままの国と答えよ

と斗南藩権大参事であった山川浩が言わしめたほどであった。

開墾に夢を託した藩士たちであったが、志半ばにして命を失った者や、この地を去るものが続出した。

翌年明治4年7月14日、政府は廃藩置県を断行。

9月4日には、斗南、七戸、八戸、黒石、館(旧松前藩)の五県が弘前藩に統合されたことにより、斗南藩はわずか1年で消滅することになった。その後、多くの藩士はこの地を去った。

このように斗南藩の治世は1年余りと短命ではあったが、会津人の先見の明と一徹なまでの姿勢は、この地に残した功績が大きいといえよう。

斗南の名の由来

斗南の名の由来は数説あり、一説は中国の詩文の中にある「北斗以南皆帝州」から出たと言われている。

北のこの地も天皇の国と変わりはなく、ともに北斗七星を仰ぐ民であるという考えによるもので、望郷への思いと、いつかは南に帰りたいという願いが込められているのかもしれない。

もう一説は、「南斗六星」を語源とするものである。

これは北斗七星に対してつけられた呼称であり、射手座の中央部を指す。この星座をよく見ると 射手が、永久に放たれることのない矢を隣のサソリに向けているように考えられる。

言うまでもなくサソリは薩長藩閥政府であり、射手は当時の会津人の心境そのものと重なり合う。





斗南藩関連史跡

1. 斗南ヶ丘(秩父宮兩殿下御成記念碑)



斗南藩が市街地を設置し、領地開拓の拠点にした場所。

藩名をとって「斗南ヶ丘」と名付けられた。井戸や土塀の跡が残っている。

昭和 11 年 10 月の秩父宮殿下斗南ヶ丘ご巡遊を記念し、昭和 18 年 7 月、斗南会津会が 建立した。

2. 円通寺



明治 4 年 2 月 18 日、数え年 3 歳の松平容大公を藩主に迎え、斗南藩の仮宿として藩庁が置かれた場所で、容保・容大公が起居を共にした。現在も容大公愛玩の布袋像などが保管されている。

また、同時に田名部迎町大黒屋文左衛門方に開設中であった藩学校新館もここに移された。

境内には明治 23 年 8 月、招魂碑が建てられた。碑面は容大公の揮ごうで、碑文は会津藩士族南摩網紀博士の撰による。

3. 徳玄寺丘



藩主容大公の食事や遊びの際に利用された場所。

また重臣の会議場であり斗南ヶ丘市街建設計画図面などが保存されている。

4. 旧藩士の墓



移住してきた 藩士と、その家族一団 1,800 人が到着した場所。

斗南藩移住の経路を伝えるため、平成 2 年 3 月、市制施行 30 周年の記念事業として記念碑が建立された。

むつ市最花地区にあり、斗南藩士追悼の碑が建立されている。

斗南ヶ丘唯一生き残りの島影家や、わずかに残っている会津藩士の墓碑が静かに佇んでいる。

5. 呑香稻荷神社



斗南藩出身で元会津藩上級武士の五男で、後の陸軍大将になった柴五郎が明治 3 年、12 歳で下北に移封された際、兄とともに仮住まいした所。

6. 斗南藩士上陸の地



会津から新しい藩庁が置かれた田名部を目指し、新政府借り上げのアメリカ蒸気船ヤンシー号に乗り、日本海周りの海路をたどって

移住してきた藩士と、その家族一団 1,800 人が到着した場所。

斗南藩移住の経路を伝えるため、平成 2 年 3 月市制施行 30 周年の記念事業として記念碑が建立された。